

生と哲學的精神

望 月 舜 勝

生といふ語は現代思想界の流行語である。生の意義とか、深刻なる生とか、或は内面的の生とかいふ語は現代人が興味をもつて普く用ゆる語である。然し生といふことは極めて直接なる事實に拘らず、十分にその意義が促へられてゐない。元來人間が生物的の生存を保つには即ち單に生きるといふためには、自己の生活とか自己の意識とかいふものを反省するよりも、外界の事物を知ることの方が直接必要である。自己の生活内容を反省することは、低き生活の階段に於いては割に益のないことである。人間が原始的の階段を遠ざかると共に、生活が高まり複雑になり、従つて生活に種々の破綻が生じて、その結果生の内面的意義といふものが反省さるる様になつたのである。而して近頃に至つては、動くともすれば生の内面的意義とか生の體驗といふことに重きを置くが爲に、哲學の如き理論は迂遠である。生活の體驗を持つて居れば、既にその人は深刻な哲學者であるといふ風に論ずる人が出

る程である。ニイチエの如きはその一例であつて、彼は多くの哲學者を攻撃して、哲學は人生とは沒交渉であると主張したのである。これ程までに生の體驗が唱へられ、その意義が尊ばれた。

併し吾々は一步進んで考へて見なければならぬ。凡ての人が生活をしてゐる又は生を體驗するといふことは事實であるが、生活の意義を明瞭に解釋してゐるか何うか、生を體驗してゐるといふだけで直に哲學者と稱する資格があるかないか、これは余程考へて見なければならぬ問題である。

世の中には實行といふことは困難であるが、考へるとか知るとかといふことは比較的容易だといふ。三歳の童兒も猶ほこれを知り、白髪の老翁も猶ほ之を行ひ難しと。これは理解が實行に比して容易なことを道破したものである。併し實行と對照しての理解の容易さは、或る事件或る對象については當嵌まる。例へば倫理の法則、盜む勿れ詐る勿れといふことは、小學校の兒童にも解る。併しながらそれを行ふといふことは、一生修養を積んでも困難である。理解は容易で實行は困難といふことは斯う云ふ場合には當嵌まる。しかし或る事件或る問題については實行は容易で理解は困難な場合がある。生活などといふことはその最も著しい例であらう。生きとし生けるもの皆生活してゐる。賢者愚者に拘らず善人惡人に拘らず、藝術家と非藝術家とに拘らず皆生活してゐる。而してその内には可なり深き體驗を持つてゐるものもあるが、生の意義如何といふことを理解して居るものは極めて稀で

ある。斯う云ふ場合には古人の所謂『百姓は日に用ひて之を知らず』といふ言葉が適用すると思ふ。百姓とは農夫といふ意味でなく、無學の田夫野人といふ意味である。かゝる人々でも生きてゐる限りは、宇宙の眞理に従つて實行して居るに相違ない。即ち日に用ひてゐるがその眞理を悟らぬことを言つたのである。

生といふものは何人も或る程度までは經驗し、或る程度までは所有してゐるが、その意義は解らぬ。そこで生といふものを吾々の世界觀にしなければならぬ。けれども生が直に世界觀であるとは云へない。茲に生の經驗と、生の意義とを別けて考へて見なければならぬ。世界觀といふものは生の意義の一種の解釋である。生を經驗することが直に世界觀にならずして、生の意義の解釋、これが世界觀となるのである。

然らば生の經驗といふことゝ、生の意義といふことゝ何うして別ち得るか。今一つの畫をこつて考へて見る。今名畫家はその畫をかいだこする。その畫に現して居る意味はさまつてゐる。しかしそれを見る澤山の人々は夫々皆自分の從來の經驗習慣、或は修養に應じて畫の意味に對して種々様々に經驗する。併し畫に表はしてゐる意味はさう澤山ある譯ではない。ゲーテの最大傑作ファストは今でも謎と稱せらる位に困難な文學的作品であつて、これに關する註釋評論を輯めたならば、立派な一つの

圖書館をなす程であらうが、しかしながらファスト劇に對する解釋は、種々雑多であらうとも意味そのものは幾つかはない。一つに纏まつたものであらうと思はれる。斯くの如く意味そのものと意味の解釋とは違はねばならぬ。意義の解釋は解釋せんとする個々人の心理上の働きであつて、その個々人の心理上の働きの向ひゆく對象は意義そのものである。現代の哲學は經驗と經驗の意義、或は心理上の作用とその作用の對象たるところの内容とを分ける。されば世界觀といふものは生の經驗そのものでは直に出來上るものではない。それは生の意義更に廣く世界の意義に對する解釋でなくてはならぬ。

所が生の意義といふものは決して單一なものではない。吾々の評價作用心理作用が向ひゆくべき對象となるものは種々様々である。科學上の眞理、道德上の善、藝術上の作品即ち美、或は親が子を愛し國民が國を愛する如く愛の對象たるものもあるに相違ない。即ち吾々の評價の方向に種々ある如くそれに對應して評價さる種々様々の價值とか意味といふものがある。即ち生の意義は決して唯一つのものではない。單義的のものではなくして多義的のものである。吾々が眞の生活をしよう。換言すれば意義のない生活に比較して一層意義ある生活、價值のない生活に對し一層價值ある生活をしようと思へば、何うしても吾々の生活の經驗の向ひゆくべき對象物言ひかへると生に意義を與へるもの、多

方面なる多義的なる生の意義を或る程度まで統一しなければならぬ、人々が深刻なる生活であるとか或は内面的生活であるとか或は精神的な生活といふ稱び方はこれは通俗の言葉であつて皆生の意義を現はそうとの要求から出たものである。外面的の生活に對して内面的の生活といふし、外面内面といふことは一体空間的な語であるが、我々の生活は別に空間ではない。生活について淺いとか深いとかいつても然り。これ等は皆物質を現はす語から借りて來ただけであつて、實はより意義ある生活、より價値ある生活を然らざるものより區別せんが爲にいふのである。

斯く我々の生には種々の意義を含んでゐる。その意義は多義的であるから我々はそれを統一しなければならぬ。この統一の仕方に種々ある。その統一の仕方の種類によつて、或は宗教的世界觀も生れ或は詩的世界觀も生れ、哲學的世界觀も出て來る。世界觀の種々の模型は生に含まれた意義の統一の仕方の相違に依存するのである。宗教的世界觀詩的世界觀は哲學的世界觀に對して言ふならば意義の統一が充分に理論的でない。意義の統一が理論的でないといふことは概念を統一の機關として利用しないことである。更に學的に言へば範疇的統一をしないといふことである。これに對して哲學的世界觀は生の意義を範疇的に統一することである。宗教的世界觀詩的世界觀はその非範疇的の統一である。

斯くの如く哲學的世界觀は生に對する我々の反省であり、生の理論的統一である。従つて哲學的精神の出發點が生活に在ることは明かである。然らばかゝる哲學的精神は如何にして出てくるのであるか。吾々はこれについて以下少しく考察して見なければならぬ。若し吾々の生活が極めて圓滿であり滑かなものであり何等障礙なく進行するものであつたならば、生活に對する反省といふものは起さないであらうと思ふ。生活に對する反省から哲學的精神が起るのであるが。生活に對する反省の起る條件が何であるかを更に根本的に考へると、それは生活の破綻といふことが更に根本的の條件であると思ふ、換言すれば生の破綻といふことが一番根本の出發點によることと思ふ。一個人としても深刻に生の意義を反省するといふのは生活の行詰りの時である。八方塞り袋小路で出て行く道がないからである。佛教でいふと所謂大疑團が生ずるのであるが、併し疑ふといふ前に生活の破綻行詰りといふことがなければならぬ。即ち生活に破れがあるから之を繕ひ直さうとして反省するのである。民族に於ても亦然り。支那の状態を見ても希臘の状態を見ても獨逸の状態を見ても、社會の秩序が整つて國家が安泰であるといふ時には却て深刻な哲學は生れない。支那に於て哲學的思想の最も隆盛であつたのは所謂春秋戰國の時代であつて、社會に統一がなくなつて諸子百家競ひ起つた時代である。希臘に於てもソフィスト、プラトン、アリストテレス等の出た頃はもう末期であつて、社會が紊れて生活

の不安時代であつた。希臘哲學の起源はもつとそれより古いけれども、その古い頃の希臘哲學はたゞ自然界の現象を眺めて宇宙は地水火風から出來てゐるとかいふ風に、自然哲學といふ形で現はれたけれども、人生そのものを含めての哲學的の思索は未だ起つて來なかつた。それは物理を中心としての研究であつたが、ソフィスト以來始めて人間生活を入れて研究したものである。獨逸に於てもカント・フイヒテの出た頃は、獨逸が四分五裂して佛蘭西に始終苛められて居つた。イエナ大學の如きは奈翁に壓迫された爲に閉校の憂き目を見たといふ様な状態であつた。ヘーゲルの如き自分の處女作を書いてゐる時にその町に佛蘭西の軍隊が駿入して來たのを見て、馬上の世界精神と呼んだと云はれてゐるのは有名な話である。これ等は社會が亂れて來たから人間の精神が反省的になつたといふべきであらう。斯の如く個人に於いても民族に於いても生活に何等かの破綻がある時には、それを繕はうとして反省が生じて來る。故に個人生活に於ても民族生活に於ても比較的生活が樂で何等生活の破綻を経験しない様な亞米利加などに於ては哲學は進歩しない。米國人は單に生活して居る人間であつて、生活に對して反省を持つて居ない人間である。米國人が非哲學的の國民であるといふのはその爲である。元來意識そのものが鋭敏に動くのは吾々の精神の平衡状態の破れた時に於てである。獨逸のシェリングといふ哲學者は、物質は精神の平衡状態、物質は眠れる精神、意識は破れたる精神だと云つた。

ベルグソンも意識は生活の破綻に於いて生じたものである。だから生活が秩序正しく無難作に出来る時に於ては意識は眠つて居ると考へた。そこで生活の破綻と共に生活の破綻を繕はうと云ふ要求から反省意識といふものが鋭くなつて来る。そうして生活の破綻が繕はれずして苦悶してゐる最中には、生活の原始的な極く昔の状態を慕ふのである。人間で云ふならばよく苛められる人間は平和な樂しげな少年時代を慕ふ、民族でいふならば『自然に歸れ』と云つて極く素朴的な原始的狀態を慕ふのである。併し吾々としてはもはや自然の狀態に歸る譯には行かぬ。一たび生活が破れたる以上は破れざる以前に歸らふといふ譯にはゆかぬ。然らば生活が破れたまゝにじつと止まつて居ればいかといふと、それも不可である。後退も停立もいかぬ。然らばこいつて前進するには未だ目當がつかぬ。こゝに於てか哲學的精神が目覺めて來り、今日の生活狀態を反省し批判して、それを繕うて行かう、即ち前進せんが爲に現實を反省する。即ち哲學は批判的精神となつて現はれて来る。生活の破綻に即して出て來る批判的精神、これ即ち一種の哲學的精神である。而して哲學は現在の秩序傳統を盛に批判するけれども、批判は目的にあらずして、或る終極のものを求めやうとするのが批判である。希臘のソフィストの如くたゞ攻撃のみでなく、プラトンの如く構成のための批判である。吾々が哲學的精神の發生したといふ時に於ては、一度立つた黄金境たる過去の狀態を慕ふてゐる譯には行かぬ。現實の

破綻したる渾沌たる状況に甘ずる譯にも行かぬ。兎に角不安ながら將來に出發しなければならぬ。がそこには羅針盤と海圖なくしては荒海に乗り出す譯には行かぬから、先づ批判をしようといふのでカントが批判を書いた時、世の中の懷疑派はどうも航海が危険であるから航海せざるに若かずとして船を陸に上げて仕舞つた。これは懷疑論者虚無論者である。それから兎に角吾々はじつとして居る譯には行かぬから、羅針盤も海圖も無しに冒險的に航海しようといふのが獨斷論者である。批判的哲學者は懷疑論者の如く航海を止めてしまはず、海圖も羅針盤もなくして冒險的の航海をするものではない。羅針盤と海圖とを用意して而る後に除に船旅に出るのであるとカントはいつてゐる。これは即ち進まんとする爲に先づ批判する態度である。基督教ではアダムイブが智慧の實を食つたから天國から追放されたといふが、實は吾々は下界の苦悶のうち破綻のうちに智慧の實を食つたものであつて、食はざる以前は無心の状態である、その時に於ては天國も眞の天國にあらず、地獄も眞の地獄ではない。故に生活の破れざる以前の原始的素朴の生活は必ずしも黄金境であるとは言へない。それは反省以前の原始的の生活と云はざるを得ない。吾々は生活の統一を求め生活の意義の統一を求めなければならない。破れざる以前の子供らしい時代、アダムイブの天國時代を慕ふべきではない。一度破れたる生活に這入り込んで、努力奮闘、統一ある生活を見出さなければならぬ。そこに哲學的精神があると思ふ。